



今月の先生

岐阜市民病院

米田 和史氏

皮膚科部長

昭和53年岐阜大学医学部卒業
岐阜大学皮膚科講師を経て平成5年より
岐阜市民病院皮膚科部長
日本皮膚科学会認定皮膚科専門医
日本皮膚悪性腫瘍学会評議員

働くあなたのクリニック



間違った知識では
治らないです

アトピー性皮膚炎

アトピー性皮膚炎とはどんな病気ですか？

アトピー性皮膚炎は湿疹・皮膚炎の中の1つの疾患で、かゆみのある皮膚が慢性に繰り返して生じること、皮膚の形や広がりがある典型的なこと、多くの患者さんはアトピー素因を持っているなどの特徴があります。このアトピー素因というのは家族や本人に喘息、アレルギー性鼻炎、結膜炎あるいはアトピー性皮膚炎があったり、以前にかかったことがある場合や、IgE抗体というアレルギーに関係の深い抗体の値が高くなる素因のことです。アトピー性皮膚炎患者は20歳以下の日本人では10人に1人いると言われるぐらい多い疾患です。

治療について教えてください。

それぞれ患者さんの年齢、素因、生活により異なりますが、まず悪化因子を避ける必要があります。悪化因子としては食物、発汗、物理刺激、ほこり、ダニ、花粉などの環境因子、細菌・真菌、ストレス、搔破などがあります。

次に主な薬物治療についてお話しします。外用剤としてはステロイド外用剤とタクロリムス軟膏が中心となります。ステロイド外用剤は以前、マスキミで副作用の恐ろしさばかりが取上げられたため、怖い薬だというイメージがあります。今だに使いたくないという人がいます。しかしステロイド剤を使用しないことは、料理をする時に包丁は怖いから使わず、手でちぎって料理をしているようなものです。非常に役立つ薬ですから皮膚科医と相談しながら怖がらずに使用することをお勧めします。タクロリムス軟膏は免疫抑制剤の一種でステロイド外用剤とうまく組み合わせて使用すると効果があります。

症状をもう少し詳しく説明して下さい。

かゆみを伴い赤みのあるぶつぶつした皮疹（丘疹）がほぼ左右対称性に生じます。皮疹は軽快再発を繰り返して、慢性化するとごわごわした鮫肌状の皮膚になります。また年齢により皮疹のつきやすい場所が若干異なります。乳児では主に頬、額、頭中心に赤い丘疹が生じ、じゅくじゅくしたりかさぶたが付着することもあります。幼児・学童期ではしだいに乾燥傾向となり、四肢の屈曲部などに皮疹が多くなります。さらに年齢がすすむとまた顔、くび、胸、背中など上半身に皮疹が多くなるようになります。かゆみが強い場合には睡眠が障害されたり、イライラして精神的ストレスになることもあります。



スキンケアについて教えてください。

治療により皮膚の状態が良くなったら、スキンケアによって再発を予防することが大切です。アトピー性皮膚炎患者の多くは皮膚が乾燥しやすく、またブドウ球菌が付着して症状の悪化に影響しています。ですからスキンケアとしてはまず入浴・シャワーで皮膚を清潔に保つことが大切です。しかしタオルでゴシゴシ強く洗うのではなく石鹸をよく泡立て軽く洗う程度にとどめましょう。また入浴後は保湿作用のある軟膏・クリームをぬりましょう。

最後にアトピー性皮膚炎は慢性の疾患で繰り返して生じるのが特徴の疾患です。治らないからといって焦って民間療法に頼るのでなく、気長に皮膚科に通院し治療をされることをお勧めします。